

二〇二三年度

恵泉女学園中学校 第二回 入学試験問題

国語（四五分）（全三ページ）

注意 一、開始のチャイムと同時に、問題用紙と解答用紙にそれぞれ受験番号と氏名を記入しなさい。

二、答えはすべて解答用紙に書きなさい。

三、字数制限のある場合は、句読点や記号も字数に数えます。

受験番号
氏名

一、虹色はネイルが好きな小学六年生の男の子です。家でネイルをしていたら、近所に住む幼なじみの咲姫が突然やって来ました。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(本文には、一部改めたところがあります。)

咲姫はおれの指をじっと見つめて言った。

「ねえ……わたしのつめにも塗ってくれないかな？」

「えっ、咲姫のつめに？ な、なんで？」

「わたし、ネイル塗ったことないから。虹色の、ネイルの練習台になってあげるよ」

うそだろ？ どうして急に？

(1) によりよってネイルなんて……いいのかよ。

思わず咲姫の右手に視線が向いてしまう。

とまどったのは、咲姫にネイルを塗るのが恥ずかしいからとか、おれがまだヘタだからとか、それだけが理由じゃない。

咲姫は、右手の中指と薬指だけがすごく短くて、人差し指の半分くらいしかない。その二本はつめもなくて、先が細く丸まっている。

ネイルなんて、わざわざ指が目立つようなことしなくてもいいんじゃないかな？

いっしゅん、そんなことを考えてしまった自分にモヤモヤする。

咲姫はそんなことを気にするようなヤツじゃないって、知っていたはずなのに……。

初めて咲姫の指を見たときのことを、おれはほとんど覚えていない。

咲姫の指が短いのは、生まれつき手や足の形が多くの人とはちがう「先天性四肢障がい」の症状の一つだということ。

そして、咲姫のように手の指が短い人もいれば、指の数が多かったり、足に症状がある人もいたり、様々なのだと母さんが教えてくれたことがある。でも、それもいつ教えてもらったのか、記憶があいまいだ。それくらい、咲姫とは小さいころからいっしょだったんだ。

覚えているのは、小学校に入学して咲姫と同じクラスになったときのこと。

別の幼稚園から来た男子たちが、「あの子、指がないよ」と咲姫をじろじろ見ていた。おれはビシッと文句を言ってやろうと思つて立ちあがった。

だけど「うるさいよ……」って小さい声でつぶやくのが精いっぱいだった。そんなダメダメなおれとは対照的に、咲姫はその男子たちの前に仁王立ちになり、きつぱりと言った。

「この指、生まれつきなの」

それ以来、それいづらもクラスのだれも、咲姫の指のことに触れなくなった。

おれはそのあと、三年生と五、六年生で咲姫と同じクラスになったけど、それは変わらなかった。

そしていつの間にか咲姫は、みんなに「姫」って呼ばれるようになっていた。毛先がくるつとしていている茶色い髪や、まつ毛の長い大きな目のせいもあると思うけど、きつと強気で、堂々としているからだ。

それに咲姫はなんでもできる。鉄棒も、二重跳びも、習字も、調理実習で包丁を使うときも、みんなより上手にできた。二本の指が短いことなんてみんなが忘れてしまいくらいに。リコーダーだけは、穴の位置を変えられるように改造されたものを使っているけど、すごくうまい。勉強だって、学年で一番頭がいいってうわさだ。

「咲姫、受験勉強で忙しいんじゃないの？」

おれは地元の公立中学に進む。でも咲姫は私立の中学校を受験するらしく、四年生から塾に通っていて時間がないはずだ。

「うん、今日はいいの」

咲姫はあっさり言うと、「あがつていい？」と聞いてきて、おれが返事もしないうちにさっさと靴を脱いだ。

やっぱり今日の咲姫は、なんだかヘンだ。

「ちよ、ちょっと待ってよ」

今、部屋に入られたら、おれのネイル瓶や、さつき作った雪だるまのネイルチップを見られてしまう。

でも咲姫はすばやく階段をあがり、おれの部屋に入ってしまった。

ああ、もう隠せない。

あわてているおれにはおかまいなしに、咲姫は雪だるまのネイルチップを指さした。

「わあ、これもしかして虹色が作ったの？」

「うん……」

「すごい！ こんな小さいところに雪だるまを描けるなんて」

咲姫は大きな目をさらに丸くしている。

「わたしのつめにも描ける？」

「うーん、それは大人用のジェルネイルを使わないとダメなんだ。咲姫に塗るのは、つめに優しい子ども向けのネイルにしておくよ。

すぐ乾くし、石けんで落とせるし」

咲姫はうなずくと、おれをのぞきこむように見つめた。

「虹色がネイルが好きなんて、全然知らなかった」

「……だれにも言わないでよ」

⁽³⁾ おれはため息をつくとき、ネイルの瓶を机の上に八つ並べた。

「どの色にする？」

「えー、かわいい色ばかりで、選ぶの難しいなあ」

(あんまり派手な色じゃない方がいいのかも)

なんてまた余計なことを考えていると、咲姫がパチンと手をたたいた。

「よし、決めた！ 全色塗る！」

「えっ、全部？ 派手になるよ」

「これ、石けんですすぐ落とせるんでしょ？ せっかく虹色に塗ってもらうんだから、今日くらい派手にしたっていいじゃん」

咲姫は目を輝かせる。

「わ、わかったよ」

(中略)

そのあと、パステルピンク、フレッシュグリーン、うすい紫色むらさきいろを塗ると、左手の指のネイルが完成した。

咲姫は指を広げると、目を近づけてじっと見つめた。

「きれいだね……。虹色、ありがとう！」

咲姫に素直すなおに言われると、なんだかおしりがもぞもぞする。

「もう、つかれたよ」

「はい、右手もがんばって塗ってね」

くたくたになっているおれにはおかまいなしに、咲姫は右手をタオルの上に置いた。

今までじっくりと見ることもなてなかった咲姫の右手の指。

たしかに中指と薬指は短いし、つめもないけど、だからなんなんだという気分になってくる。

これが、咲姫の指だ。

会話が途切れて、咲姫はしばらく窓の外をながめていた。

そして、急にぼそつとつぶやいた。

「ほんと今日は今日……塾の模試の日だったんだ」

とつぜんの告白に、おれの方がビビった。

「えっ、ヤバイじゃん」

「いいの。サボるって決めたから」

「ど、どうしたんだよ。やっぱり受験やめるわけ？」

「なんだか、自信がなくなっちゃって……」

おれはそれ以上のことを聞いていいのかわからず、ひたすらネイルの筆を動かした。

右手の人差し指のつめがオレンジ色にそまると、咲姫が口を開いた。

「大丈夫かな……わたし」

思わず手が止まる。

「今まで、幼稚園からずっといっしょの友だちが多かったから、指のことを聞かれることはほとんどなくなったけど、でかけたときにじろじろ見られたりするんだよね。あからさまに『あの、指がへん』って言われることもあるし」

おれはうなずくことしかできないまま、また筆を動かし始めた。

「中学校に受かったら、初めて会う子ばかりになるんだって思ったら、なんだか気が重くなってさ……。わたし、ちゃんとやっていけないのかって」

いつも強気な咲姫が、こんなことを言い出すなんて……。

そういえば、いつか、母さんが言ってたことがある。

「ネイルをしていると、お客さんがふだんは言えないようなことを話してくれることがあるんだよね」って。

そういえば、最近、咲姫と二人だけでこんなにゆっくり話す時間なんてなかったもんな。でも、まさか咲姫が不安になっているなんて想像もしてなかった。

なんだかいつもと様子が違うちがうと思っただけ、もしかしたらこのことを言いたかったのかもしれない。

けつきよくなにも声をかけることができないうまま、⁽⁴⁾ 金色のグリッターが入ったネイル……そう、おれの指に塗ったのと同じネ

ルを、咲姫の右手の親指のつめに塗り始めた。

そして、なぐさめの言葉を全力で考える。

えーっと「咲姫らしくないじゃん」「咲姫なら大丈夫だよ」とか？

うっ……おれが咲姫にそんなこと言う？ それこそおれたちらしくなくて気もちわるい。

そもそも、咲姫ならちゃんとやっつけていけるに決まってる。

それに……。

「もしなにかできないことがあっても別にいいんだって、それを教えてくれたのは咲姫だろ」

「えっ」

おれの言葉に、うつむいていた咲姫が顔をあげた。

「咲姫、運動会のこと覚えてる？」

運動会では、六年生はクラス対抗全員リレーをするのが恒例になっていた。

体育の時間に何度か練習をしたけど、三クラス中、うちのクラスはいつもビリだった。

足が遅い米谷くんと、咲姫と仲がよくてぼっちらりしている岡本さんにバトンが回ると、それまで勝っていても、いつも大きく引

きはなされてしまう。順番を変えてもうまくいかなかった。

ある日の練習のあと、足の速い男子たちに「岡本、米谷、もっと本気で走れよ。勝てねーだろっ！」って言われて、岡本さんが泣いた。米谷くんもうつぶんでいた。

かばいたくても、おれも足が遅いからなにも言えないのが情けなかった。でも咲姫は岡本さんといっしょに帰り、翌朝、担任の先生に提案した。

「各クラスで何人か、長い距離きよりを走る子と短い距離で走る子を決めて、他のみんなは今までと同じ距離で走るのはどうでしょうか。タイムで決めるんじゃないかって、みんなで作戦会議をするんです。作戦次第しだいで、結果が変わってくるのがおもしろいと思います」

てつきり岡本さんをなぐさめて、少しでも速く走れるように励はげましたのかと思っていたから、A。

たとえば足が遅くても、みんなと同じ距離を走らなきゃいけない、迷惑めいわくをかけちゃいけない……おれはずっとそう思いこんでいたから。

きつとみんなは反対するんだろうなって思っていたら、岡本さんをせめていた男子たちが「それいいじゃん！」と言って、岡本さんや米谷くんや、足の遅い子たちもうなずきだした。

あれ？　これってアリ……なんだ。

休み時間になると、岡本さんが笑顔えがおで「姫、ありがとう」って咲姫に言っているのが見えた。

あつという間に咲姫のアイデアは学年全体で採用され、クラスの練習は前より盛りあがった。

ある日の下校中、咲姫に言った。

「よくあんなこと思いついたね」

「勉強だったら、親が見ている前でいっせいにテストを解いたり、点数を発表されたりしないし、クラスで対抗して競つたりしないよね。なんでかけっこやリレーだけ全員がそんなことしなきゃいけないんだろって疑問に思っただけ」

「岡本さんも米谷くんも、テストの点ならいつもぶつちぎりだもんな」

おれが言うと、咲姫は強くうなずいた。

「みんな同じことができなくなつていいよね。できないんじゃなくて、得意なこととか好きなことが違うだけなのに……」

咲姫のその言葉を聞いて、おれは勉強や運動が苦手でも、ネイルが趣味しゅみでも、みんなと違っていても、別にいいのかもしれない……って少しか自信がわいてきた。そして、ますますネイルが好きになったんだ。

おれの話聞いて、「そうだったの？」って咲姫が目丸くした。

「そうだよ。だから……咲姫は今までどおりで大丈夫ってこと」

おれにしてはめずらしく、強く言いきった。

まあ、咲姫じゃなくて、咲姫のつめを見ているから言えたんだけど。

「よし、できたよ」

おれが親指のつめを塗り終わると、咲姫はパッと両手の指を広げた。

「わあ……」

レモンイエロー、空色、パステルピンク、フレッシュグリーン、うすい紫、トマトレッド、オレンジ、そして金色。あざやかな八つの色が、咲姫の指先でぴかぴかに光る。

「なんだか、いろんな花が咲いたみたい」

「おれにはチョコにしか見えないけど」

「え？ チョコ？」

咲姫はくすつと笑うと、「すごい」と言いながら、指を右からながめたり、左からながめたり、窓から入る光にかざしたりした。

「わたしの指、こんなにきれいだったんだね」

恥ずかしくて、うなずくかわりに軽くあごをひいた。

「ほんとはずっとネイルをやってみたかったんだ。でも勇気がなくてさ」

咲姫はじつと指を見つめながら、声をしぼりだすように言った。

「今まで、『指がない』って言われると、違うのになっていつも思ってた。わたしには、親指も、人差し指も、小指も、短いけど中指も薬指もあるのに、なんでみんな『ない方』にばかり目を向けるんだろうって。なのに、いつの間にか自分が気にしちゃってたんだね」

今度はしつかりとうなずく。

「虹色にネイル塗ってもらって、話をしていたら……そのこと思いだしたよ」

咲姫は、さっぱりした顔でおれを見た。

「あのさ、別の中学に行っても、ネイルしたくなったら……またうちに来ればいいじゃん」

こう言うのが精いっぱいだった。それでも咲姫は目をキラッと輝かせた。

「いいの？　じゃあ、楽しみにしてる」

そんな咲姫を見ると、ネイルチップが完成したときとは違う感情がわきあがってきた。

咲姫とは、小さいころからいつもいっしょだったけど、こんなに喜ばれることをしたのって、きっと初めてだ。

だれにも知られちゃいけない趣味だと思っていた。

ネイルチップができればそれで満足、って言い聞かせていた。

でも、ネイルを塗ってあげた人が少しでも元気になってくれるのって、うれしいことかもしれない。

それを男子がやったって……いいのかもしれない。

咲姫は中学に行ったら、もうおれんちなんて来ないかもしれないけど、それでもいい。

もし、落ちこむようなことがこれからあったとしても。

次は指先にどんな色を塗ろう？

それを想像するだけでも、きっと少しは明るい気持ちになれるはずだ。

⁽⁵⁾ 咲姫も……そしておれも。

問一 ⁽¹⁾ よりによってネイルなんて……いいのかわとありますが、このように思ったのはなぜですか。三〇字以内で説明しなさい。

問二 ⁽²⁾ 仁王立ちになりとありますが、ここには咲姫のどのような性格が表れていますか。解答欄に合うように本文中から一〇字程度で抜き出しなさい。

問三 ⁽³⁾ おれはため息をつくとありますが、ここから読み取れる虹色の気持ちとしてふさわしいものを次のア～オの中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分はネイルに興味があることを、せめて咲姫には言っておけばよかったという後悔。

イ 急に咲姫のつめにネイルを塗ることになり、貴重な時間が取られることへの不満。

ウ ネイルが好きなことを幼なじみに知られ、他の人にも広まってしまうことへの不安。

エ ネイルを自分だけの趣味として独り占めできなくなってしまったことへの落胆。

オ 咲姫のペースに巻き込まれて困りつつも、ネイルを塗るより仕方ないというあきらめ。

問四 X 「」における「おれ」の心情の変化の説明として最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 模試をサボったという咲姫の言葉に、はじめは動揺し、ふだんとは違う自信のない咲姫の内面を知ることえんりよに遠慮する気持ちもあつた。だが、指のことで悩んでなやいるのだとわかり、意外に感じながらも受け止めようとしている。

イ 咲姫が模試をサボったと聞いて、自分が共犯者になった気がして少しこわくなってしまった。しかし、咲姫が受験をためらっていると知り、受験についてよく知らない自分がこれ以上相談にのるのは無理なので、ただただ深く同情した。

ウ 咲姫が模試をサボるなんて意外だったので、うろたえてしまった。だが、咲姫の悩みは受験そのものよりも新しい環境かんきやうでの周囲からの視線についてだったので安心して、咲姫を励はげましながら、一緒いっしょに乗り越えようと思った。

エ 模試をサボったという咲姫の言葉も意外だった。しかし、指のことで傷ついたり、知らない人たちの中に入っていくことを不安がったりする咲姫の姿は、さらに想像の域を超えた驚おどろきであり、その驚きは次第に悲しみに変わっていった。

問五 ⁽⁴⁾ 金色のグリッターが入ったネイル……そう、おれの指に塗ったのと同じネイルを、咲姫の右手の親指のつめに塗り始めた

とありますが、このときの虹色の気持ちの説明しなさい。

問六

□ A にあてはまる言葉として最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア むっとした
- イ びっくりした
- ウ ほっとした
- エ がっくりした

問七

咲姫も……そしておれも⁽⁵⁾とありますが、ここから読み取れる虹色の思いを説明しなさい。

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(本文には、一部改めたところがあります。)

死なせるとか、ころすとか、まことに穏おだやかならぬことを、これはまた至極しごくおだやかな調子でいつているので、なんのことなのかときき耳を [I] たら、壁土かべつちづくりの話をしているのだった。死なすの殺すのとは、腐くさらせることなのである。念入りの建物には、壁もまた念入りになるが、そういう時、壁の材料である土は、二年も三年もかけて、いちど十分に腐らせてから使う。その腐らせることを、話していたのである。

職人さんたちは、よく、たいへん的確なものいいかたをする。 [A] その職らしい、たくみな言葉をつかう。死なす、ころす、ほどの職の人もよく使う言葉だが、この激しい言葉がいわれるときには、その状況じょうきょうや感情が、実に目に見るようわかることが多い。しかし [B] 、土をころすとは、どういうことなのかとおもった。ものを腐熟ふじゅくさせることは、寝ねかす、寝かせるなどという、やさしい言葉も使うのだから、それを殺すと荒々あらからしくいうのには、それ相当のなにかがあるのだろうと察した。するとその私の気持を見抜ぬいたように、なにしろ土は生きているのだから、殺さなければ思うようには使えない。それに土は性根しょうねの強いものだから、死なすには相当ほねを折らなければならないのだ、という。 [C] 、ただ使っている言葉ではなくて、激しいいいかたに釣合つりあうだけのものが、あるらしく察しられた。

土を死なすには、用量の土に、適当な水を加えて、捏こねる。土はやわらかくなる。それを縁高ふちだか、中くぼみに形づける。窪みくぼの中に

水をたたえる、縁高だから、水が外へ流れだしてしまうことはない。そのまま放置しておく。四季がめぐる。春の蒸すような暖気、つゆの長雨、夏のひでり、秋の冷え、厳冬の凍上と、土はいたためつけられて、だんだんと腐っていく。しかも、より万遍なく腐らせるために、この間に何度も捏ねなおされる。人の足で、踏みこねるのだという。つい思わず、その作業を想像しておかしくなった。子供のどろんこ遊びとおなじで、なんと汚ならしく、そして滑稽である。

(中略)

そういう作業をくり返すのが、つまり、生きている土をこらす、ことなのである。では、土が生きている、とはどういうことなのか。土が、本来持っている自分の性質を持ち続けているかぎりは、生きている土なのだという。それなら、土本来の性質とはなにか、といえばそれは、固まる、ということなのだ。時や場合によっては、固まるというその本来の性質が、本来のまま非常に役にたつ。しかし、念入りの壁をつくろうとする際の壁土としては、土本来の性質のままに固まられたのでは、いい壁にはならない。勝手に固まるから、壁にぬり上げたあと、干割れ、ひびわれが入ってしまうからである。だからどうしても、性来の固まる性質を一度くさらせ、殺して、いわば癖抜きをするのである。癖をぬかれて、仕上がった土は、さらさらしているし、色も曝されて淡くなっている、という。そうなっではじめて、壁土として役にたつのだが、実際に壁に塗る段になれば、そこで劫と呼ばれるつなぎを入れることになる。固まる癖をぬかれた土なのだから、つなぎをまぜるのである。

こうきいてくると、⁽¹⁾ 死なす殺すという激しい言葉が、無理なものだということがよくわかる。本来の性質をもったままの土を、

生きている土と考える考え方もおもしろいし、本来の性質を抜いてしまう操作を、ころす死なす、という言葉で表現するのもおもしろい。そのものの形態も、そのもの本来の性質も、ともに消し去ってしまうのが死というものだが、この場合は、本来の固まるという性質だけを消して、土そのものの形は残る。しかし、本来の性質をもっている土を、生きている土と考えるのだから、その性質を消そうとする時、それはまさに、死なす、というほかないのである。こちらの意志や力を敢えて加えて、死なせるのである。その死なす、殺すという言葉は、みごとにぴたりと、事柄にあてはまっているのだった。

生きている土という考え方、そしてそれを死なすといういいかた——職の人が、その職のことを話すとき、言葉と事柄にズレがないのが心にしてみた。そしてもう一つ、心にしてみたのは、鼻ももげそうだという悪臭のことである。その話のときつい、くさいものを捏ねる人の姿を想像して、子供の遊びのような、と私は口をすべらせたのだが「とんでもない、けぶりにもおかしいなんてものじゃない」と真顔ではねかえしてきた、それほどのその悪臭のことである。ものがいのちをおえれば、たいがい臭気をはなつ。それが自然の仕組、筋道である。土といえども、その筋道はおなじといえる。死なされて、悪臭を放つのは当りまえだ。だが、思えば死なされたのは、土のからだ——からだといえるかどうか心許ないが、とにかく土の形そのもの——ではなくて、持っている性質なのである。生れつきの性質というか、自我の強いままにある性質というか、それが殺されたのである。死なされたのは、気ままに固まってきたがる、本来の性質だった。だから、鼻のもげそうな悪臭は、あるがままの、勝手気ままなその性質がころされようとする時、抵抗し、抵抗し続けて、うめいて、身をしばって放った臭気だ、とそんなふうに私はおもう。

そう思ったとき、なにかしきりに感情を去来するものがあつた。そんな悪臭をあげなければ、死ぬにも死なれない持つて生れた性質というもの。自分自身も躓もがいて苦しまなければ捨てられないもの、そしてそれは周囲の人をも辟へん易えんさせるものなのである。持つて生れたのがいい性質ばかりなら、いうことはない。だが、自他をとものにいためる嫌いやな性質を、誰だれでも、多少はいわず、かならず持つて生れているのである。その性質を捨てなければ、という忠告は誰でもが身におぼえがあろう。親から師から友人から、多かれ少なかれ、注意された筈はずである。持つて生れた性質——それを思いあわせれば、ひどい悪臭を放つて、最後まで人を困らせながら、ついにその性質を抜き去つていく土は、私(3)にはひとつの話ではなく身にしみた。最初にきいたときは笑つた悪臭だが、いまは心惹ひかれる悪臭である。我わが身にも内蔵していることがたしかな、哀かなしい悪臭といえるのだった。

(幸田文『季節のかたみ』)

問一 I にあてはまる最も適切な語を次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア よせ イ かくし ウ すませ エ たて

問二

A C にあてはまる語として最も適切なものをそれぞれ次のア～ウの中から選び、記号で答えなさい。た

だし、同じ記号を二度使ってはいけません。

ア それにしても イ やはり ウ いかにも

問三 ⁽¹⁾ 死なす殺すという激しい言葉が、無理なものだ とありますが、なぜそのように言えるのですか。その理由として適切なも

のには「A」を、そうでないものには「B」を書きなさい。

ア 職人のすべての作業が、土が固まらないようにする残酷な行為だから。

イ 土の性質を徹底的に消すために、職人が何度も力を加えるから。

ウ 職人は、本来の性質を保ち続ける土を生きているものと捉えるから。

エ 土をいたためつけ腐らせる作業には、職人の悪意がこもっているから。

問四 ⁽²⁾ 辟易させる とありますが、その意味として最も適切なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア うんざりさせる

イ がっかりさせる

ウ やきもきさせる

エ おろおろさせる

問五 ⁽³⁾ 私にはひとごとの話ではなく身にしてみた とありますが、ここでの筆者の気持ちを説明しなさい。

三、次の①～⑤の文のカタカナを漢字に改めなさい。

- ① 事実から行動をスイソクする。
- ② ケットウ書付きの犬を飼う。
- ③ 世の中のフウチヨウに逆らう。
- ④ みすみすカンカできない事態だ。
- ⑤ 彼はキテンの利きく人だ。